表題〝甦れ蒼い北の海〟に寄せて

体育館に「敬愛互譲」の額が掲げられています。この言葉は初代校長黒澤与衛作先生が校訓として決められたもので、その頃は四文字のひとつひとつが装され、その四つを連ねて掲げていたのです。その後金子鷗亭先生が自ら提唱して書き改めたのが現在のものなのです。開校二十周年の頃でした。当時教頭小川澄先生がこの記念事業に専心され、札幌に住む私に何度も電話を下さったのです。面識のないままその後二十年を重ねました……

四十周年記念式典出席の私の返事に対する稚内からの思いがけない電話なのです。「先生にお世話いただいた「敬愛互譲」の書は今体育館に大きく掲げています。学校の宝のひとつになっています。」……この電話は私と稚内を結ぶ、懐かしく、とてもうれしいものでした。「あとわずかで私の仕事が終ります。記念に何か形として残していきたい。先生の書がほしいなあ。敬愛互譲と対になって…稚中の生徒が生きいきとした大人になってほしいのです。」私は小川先生の真心に感じ入ってしまいました。先生の希いを大事にしながら「甦れ蒼い北の海」を体育館に揮毫させてもらいました。抽象的な語でありますが、無限の人間愛を息づかせたく思うのです。（小川澄校長退職記念誌より）

「創立四十周年を機に最北の宗谷・稚内中学校を訪ねました。三十六年ぶりで校舎も、辺りも、人もすっかり変わっていました。ですから、これまでに私の中に馥郁（ふくいく）と培われていたものが、ひと時もろくも崩れ去ろうとしました。……日本の最北端、それはひとつの緊張感なのです。冬の宗谷岬は言いようのない深みを溜めこんでいます。朔風に波立つ滄海は、とてつもない大きさで迫ってきます。……私は今この宗谷の海に立ちつくすのです。ここでまた、複合化された響きとしての海鳴りが私の体に甦るのは決して不思議ではありません。……北の大地に住む人々は、互いの語らいの中にあるいは北の海の響きの中に自らを甦らせ、感動し、可能性に夢を託して歩みつづけるでしょう…

学校の体育館に掲げた私の作品「甦れ蒼い北の海」は、北に生きたことがあるというひとつの流れの中に、自分を甦らせる私の気の高ぶりとでも言えましょう。（「貝殻の耳」より）

中野北溟　氏
（なかの　ほくめい）
大正12年７月31日、焼尻島に生まれる。
昭和18年、北海道第３師範学校（旭川）卒業。天塩郡豊富町立兜沼国民学校、稚内、旭川、札幌の各市立中学校を歴任。
昭和54年、書作に専念するため札幌中学校長を依願退職。

自分の未来に希望をもって、仲間といっしょに、生きていこうとする多感な中学生。共に生きている私達大人の気の高ぶりを、この五十年の歴史をまとめようとする記念誌の表題に込めたいと思い、札幌に住む中野北溟先生に電話で希いを伝えました。

快よく写真を送って下さって表題とすることができました。心から感謝申し上げます。

（昭和二十三年～二十六年中野文也先生として稚中に在職されました。）